

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

う あん こ 雨安居

平成 2 8 年 6 月 第 2 週 放送

これからは梅雨の季節です。梅雨の時期は、野外での活動が制限されて屋内での活動を余儀なくされることが多くなります。

「雨安居」とは、雨季の定住生活のことです。インドの古典語であるサンスクリット語では「ヴァルシャ」といい、“雨”や“雨季”を意味します。仏教の生まれたインドでは、春から夏にかけての約3ヶ月間 雨季を迎えます。この時期に、修行僧は1ヶ所に集まり、集団生活をします。これを“安居”とって、お釈迦さまの時代からの伝統に基づくものです。

現在では、僧侶はお寺での定住生活が基盤となっていますが、もとを辿ると、この雨季の定住生活のための住居が“お寺”になっていったとも考えられます。インドにはお釈迦さまの時代の遺跡として、「祇園精舎」や「竹林精舎」などがあり、“精舎”は修行僧が定住する場所という意味です。

修行僧は「雲水」とも呼ばれます。行き交う“雲”や流れる“水”の如く、修行の場や優れた師匠を求めてさまざまな場所を巡ね歩きます。自らの仏道参究の場を探し求めるのみならず、訪れる先々で出会うさまざまな人たちとの交流を通して仏教を広めるため、修行僧たちは各地へと散らばり、個々それぞれの活動を展開していくのです。

しかしながら、その修行僧たちも雨季になると、その活動は制限されざるを得なくなります。天候の不順は、徒歩による往来を困難にしますし、草木や昆虫などの活動が活発になってくると、それらのいのちをそこなう可能性も高まります。それを見越して1ヶ所に定住し、優れた指導者の下での集団生活を通じて、自分の境地を高め、教えを分かち合うようになったのです。

この慣習が禅宗の生活の中にも取り入れられ、中国から日本へと伝わる中で、夏と冬の年に2回、約3ヶ月間の集団生活が、現代に伝えられてきています。

毎年この「雨安居」の時期、大本山永平寺では道元禅師の『正法眼蔵』に直接触れる「眼蔵会」（げんそうえ）が、大本山總持寺では瑩山禅師の『伝光録』に触れる「伝光会」（でんこうえ）が催されます。700年余り前の祖師のお示しに接することで今の自分が映し出されます。

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

「^{うあんご}雨安居」の原語である「ヴァルシャ」のもう一つの意味は「^{とし}歳」です。この鬱^{うつうつ}々とした「^{うあんご}雨安居」を乗り越えると、修行僧も一回り成長し、僧侶としての「^{とし}歳」をひとつ重ねることになるのです。

梅雨の時期は身体の動きも制限され、気持ちも塞^{ふさ}がりがちですが、じっくり自分と向き合うチャンスでもあります。書物を繙^{ひもと}いて、いにしえの偉人の言葉に耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

— 終 —